

## 近代の短歌と俳句

### ◎短歌十首

牛飼うしかひが歌よむ時に世の中の新しき歌大いに起おこる

伊藤左千夫いとうさちお

真砂まさごなす数なき星の其その中に吾われに向ひて光る星あり

正岡子規まさおかしき

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

佐佐木信綱ささきのぶつな

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

島木赤彦しまきあかひこ

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

斎藤茂吉さいとうもちきち

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顛いぐるひそめし日

北原白秋きたはらほくしゅう

ダイナモの重うなき唸りのここちよさよあはれこのごとく物を言はまし

石川啄木いしかわたくぼく

牡丹花ぼたんかは咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ

木下利玄きのしたりげん

むくむくと春の錦雲ふえてゆき桃咲き梅散り椿つばき狂へり

馬場あき子ばばあきこ

はらはらと黄の冬ばらの崩れ去るかりそめならぬことことの如くに

窪田空穂くぼたうつほ

◎俳句十首

赤い椿つばき白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐かわひがしへきごとう

白牡丹はくぼたんといふといへども紅こうほのか

高浜虚子たかはまきよし

をりとりてはらりとおもきすすきかな

飯田蛇笏いいただごう

銜くだまして山ほととぎすほしいまま

杉田久女すぎたひさじよ

来しかたや馬酔木あしび咲く野の日のひかり

水原秋櫻子みずはらしゅうおうし

七夕や髪ぬれしまま人に逢あふ

橋本多佳子はしもとたかこ

算術の少年しのび泣けり夏

西東三鬼さいとうさんき

蝶墜てふおちて大音響の結氷期

富澤赤黄男とみざわかきお

しんしんと肺碧きまで海のたび

篠原鳳作しのはらほうさく

うしろすがたのしぐれてゆくか

種田山頭火たねださんとうか